海外学界ニュース

ホンコン・タイワン佛教学への望蜀の言

佐々木現順

従来、私は欧米の佛教学について関心を深めていた。その理由は約七ヶ年の間、欧米の大学で職を奉じ、ハンブルグ大学やハーバード大学で講義せねばならなかったから欧米のことばかり報告して来た。然るにインドを除く東南アジア諸国については古典の知識に基づいた思念に限られていて現状について極めて乏しい関心しか持っていなかったことを今更はじ入る。ところが、最近、次の理由でいくらかの関心を持たざるをえなくなって来た。即ち、第一、かねて欧米で出会うホンコン・タイワン人の研究を傍見しつつ自ら主観的に感じていたところのものを現地において確かめてみたいと思った。第二、行政的にであるが、最近タイワン・ホンコンよりの日本留学生が増加しつつあり、特に、私のセミナーの大学院にも二・三の中国人が中国文学でなく原始佛教学研究という意外な領域を研究するために集まって来た。そのためその指導にあたって、先づ彼らの原地をたしかめ、その諸研究機関の現状と将来及び諸機関の要望を現地で体に感じ取っておきたいという責任感も手助ったことは否定出来ない。この外国人指導方法は諸外国の教授の間では珍しいことではない。今までアメリカ、ヨーロッパの学生も私のセミナーに来ていたが、欧米について若干の経験があるため彼らとの交流は極めて円滑に行われたと信じている。又、彼らも非常に気楽な気持で学問以外の日本の現状を批判し、又私の欧米批判にもかなり同調してくれたように感じた。現在、中国留学生が中国以外の我々インド佛教に関心を示して来たこと自体一つの進歩といわねばならないと考えた。故にそれら諸君の国を先づ理解しておくことの必要を痛感した次第であった。

さて、ホンコン・タイワンは私の欧米生活中、数度にわたって見学したところであったが、ほとんどは通過の域を脱していなかった。幸い今回機会をえて一九六九年八月二十五日よりわづか十五日間であったが、一つの目的だけ持って滞在することが出来た。ここでは多くを述べることは出来ないが、ただ欧米と比較して特に今後のためにこれらの国々に望みたいことだけを拾いあげておきたい。しかし、現状をよく知らないことから起きた単なる夢想であると叱咤をうけるかも知れないけれども私の一所感として寛恕を乞いたいと思う。

一、ホンコンに大学に準ずる研究機関として英国系のホンコン大学がある。しかし、ここには佛教はもとより中国文学のために専門化された研究部は存していない。しかるに九龍側に一九六四年に独立した新亜研究所が設立せられた。この研究所は中国ホンコン大学(崇基・新亜・聯合三学部)の一部であるが、中国文学・哲学・西洋文化に関する専門研究学部が設けられている。東洋に関する専門研究部門が漸く新しく出発したばかり

であるということは現代に於けるホンコンの政治的意味と共に注目すべきことであろう。たまたま会った高校生達の間でさえホンコンの独立運動或は英語に代る中国語の進出に対して非常な熱意が見られた。かかる言語を通じての革進運動は洋の東西を問わない。インドに於ける英語とヒンディーの国語紛争或はベルギーに於けるフランス語とフレエンミシュ語との文化的革進運動などそれである。而もかかる運動の先端は学生であることは言うまでもない。大国の間に介在する諸国家及びインドの如き大国にして而も伝統的文化を持てる諸国の間という二種の国家にのみ見られる運動の特色は言語の問題であると思われる。

それはともあれ、ホンコンはインドの如き数百種にわたる言語の複雑性はなく、英語とマンダリーン語で用が足せるという市民生活を展開している。このことは大学に於ける中国語学学習に極めて便宜を与える。後述する如く、タイワンに於て中国語を学ばんとするよりもホンコンが現在の日本の国際的位置から言って最も近い国であろう。北京発音も充分学びうるらしい。そもそも中国語研究は日本の佛教学者の間にうとんぜられているが、これは将来、改むべきものであろう。佛教学者にとって現代ヨーロッパ語特に英語力が重要であると同じく、アカデミカーには中国語研究が何よりもモーダンな分野である。ドイツの大学特にハンブルグ大学等に於ける佛教学及び学生達が中国学にも通じ中国語乃至チベット語会話にも不自由しないほど熟達していたことを知っている。筆者も講義した場合、中国語の研究が最も重要であることを痛感した。この点で、今後、若い佛教学徒は近いところでは中国或はホンコン大学へ留学されんことが望まれる。単なる中国学専門学徒に限らない。ホンコンには欧州の学徒が少からず留学している。若干の日本人留学生にも会ったが凡て中国学専門の学生らに過ぎなかった。

インドの場合も同じであるが、英語を話さない学者に勝れた多くの伝統的学者がいる。インドではこういう学者はパンディトというのであるが、ホンコンに於ても中国文化に育成されて中国から渡って来たいくらかの学者がまじっている。例えば唯識学者羅時憲の如きである。新亜研究所教授であった彼は最近「唯識方隅」なる論文を「法相学会集刊」第一輯に掲載している。彼は成唯識論の英訳完成に従事している所の韋達の師である。韋達は現在、九竜におり、ホンコンの法相佛教研究所の指導をしつつ、時折タイワンに出講している。英語が通じない諸学者と立入った談合を交えねばホンコンにつたえられて行く伝統的佛教学の現状・将来を確実に知ることは出来ないと思う。この点、中国語を解せないことは誠に遺憾であり、単なる英語通訳による理解を記することはひかえねばならない。ただ客観的資料から見ると佛教に関しては総括的なものが多いようであるが所謂ヨーロッパ的テキスト批判という研究方法は佛教に関する限り、見うけられない。ここで我々は佛教の如き外国文化の研究には比較研究が重要であることを知らされる。インドのパンディト達の研究からも同様な印象をうける。但しインドの学者達の伝統的分析の中に屢々、合理性を越えた民族的直観がひらめくのを見た。その勝れた越合理性がつかめずしてテキス

ト批判をなしても単なるテクニックに終る。その点で自国文化に専心する学者達の伝統的研究から出てくる直観こそ実は我々の最終目的でないかと思われる。日本の我々が注目してよい研究はかかる伝統的学者の伝持の仕方であろう。これは日本の一学徒からの希望であるが、中国に於ては単に伝統的研究に止まらず、一歩前進して東西哲学の比較研究が進められている。この方面では唐君毅教授のセミナーは特色を発揮しているようである。温厚な唐教授はヨーロッパ近代哲学に明るい。又謝幼偉教授の研究も注意すべきであろう。

幸い本学の原始佛教学専攻の大学院に新亜研究所より霍韜晦氏が留学に来ている。この研究所より新亜学報が出版されている。彼は米国ハーバード大学燕京研究所の奨学金を得て現在私のセミナーでインド古典語の学習に従事している。更に又、珠海書院出身の梁道蔚氏は京大で二ケ年の研究生活を経てから本学の大学院で原始佛教学を専攻し目下、私のセミナーで異部宗輪論研究に従事している。

タイワンもそうであるが、中国に於ける佛教研究者にとって不充分な点はインド佛教学の背景を持たなかったという点であった。国際的特に欧米の学界を念頭におくとすれば、佛教学がインド的背景を考慮に入れて思想的体系の意味付けを与えてねばならないことは言うまでもない。この方面への前進こそ将来のタイワン・ホンコンに於ける佛教学者の取るべき飛躍であろうと考える。

他方、日本の佛教学者についても新しい展望を期待してよい。それは佛典漢文とインド古典との対照研究だけではなく、基本的には佛典漢文そのものの中国語的了解を先づ把えておかねばならないことである。当然のことであるが、従来、たしかにゆるがせにしていた点でないかと思う。即ち、佛教学者の間に中国語そのものの研究がゆるがせにされて来たということである。中国語研究が新しい分野になろうということを今更言わねばならないほど佛教学者の中国語に関する知識は乏しい。この点で今後、ホンコン・タイワンは中国語研究のために開かれた新しい門戸であると思う。現にこれら諸研究所には欧米の学徒が中国語研究のため多数集っているのを見た。佛教という外国文化を学ぶために先づ語学研究が第一である。哲学というものは一生かかって、自分の手で作り上げるべきものであって、人から学ぶだけでいいものではない。極端な言い方だが、大学で学ぶべきものといえば語学しかなかろうと言ってもよかろう。

二、タイワンはその一部の台北しか訪ねていないから全般的な印象は書類・図書論文に頼る外ない。ホンコンと著しく相違していると感ぜられたのは佛教が寺院という形で一般の手に生きているという点である。又、研究機関に於ける不充分な点はこれらの佛教寺院が出版の一部を担当しているようである。大学としては中国文化学院の佛教研究所があるのみで、曾って本学の修士を卒業した張曼濤氏が助教授として資料を収集して努力している。前文部大臣であったという張其的理事長はハーバード大学の学位を持ちタイワンの文化興隆に絶大な寄与をなしている重要人物である。彼によると「中国本土より移動して来

た諸学者の中に中国の中心思想たる道教の学者がおらず、従って佛教学者の養成に力を出さねばならないという状況にある」という。張其昀は文化的教育的方針は道教の倫理と社会観によるということを強張していた。彼はまれに見る中国紳士の風貌と卓見を有していた。ここで我々は黄彰建、許倬雲・蕭春溥・盧毓駿等の各学科の諸教授と食を共にして意見の交見の交換をなした。外来の講師として中国文化学院その他へ出講している篤学の士に印順がいる。彼は先に「論書与論師之研究」を著して、タイワンに於ける佛教がアビダルマを対象とするに至っている証左を示した。又、「中華佛教史蹟」一巻を彼の会館より出版している。談論してみると極めて明快な卓見を持っており、それのみでなく、伝統的解釈と近代的考え方との比較研究にも充分な識見を示した。外には旧来、私が持論として持っていたところの三世実有法体恒有について論じ合った。その結果「三世に法体が恒有である」とする日本での解釈は正しくない。これは「三世実有。法体恒有」という如く二種の文と理解すべきであるとする私の自説に対して直に共鳴を得たが、このことは今後の研究にとって力づよい。この問題は更に松山寺の学者道安師の賛同もうることが出来たことである。佛典漢文を漢文として読解する伝統的理解でも近代的研究方法によって合理化せしめうる一例であると考える。かかる寺院の学匠によって出版されたものは他にも多い。大虚大師「楞厳経摂論与研究」、楽清朱鐘宙「詠莪堂佛学著述羅」又は「中華大典」等である。

なお、大学水準の研究機関以外に意外な活動が見られた。それは中華佛教文化館長として佛教文化雑誌発行或は講演等で活動している東初師の貢献である。台北市外の北投に立派な会館を持ち、絶えず研究にも余念がない。かなりの信者とスポンサーによって寄進されたという会館はあだかも日本に於ける寺檀関係を思わしめた。中国の華僑が寺そのもの或はその附属物への寄進の志の厚いことは曾ってペナン或はクアルランプール等を訪ねた時も同じく感ぜられたことであった。ただし、学僧は必ず経典の講読を以て、信者に対する布教法としており、単なる説教ではなかったが、この点、中国佛教の文化的発展史を取扱う我々にとっても重要なことであると思う。佛教文化活動に従事している東初師に著書「中印佛教交通史」があり、或は斯界の文献が充分集められたライブラリーを会館内に設置せられていることも不思議ではない。現在の段階ではこうした大学以外の諸文化機関にいくらかの学者が佛教を研究している。即ち、佛教学は大学に於てはその緒についた許りであるが、一般寺院の中に佛教学と布教との一致した形態即ち行学一致という形態が残されている。この形態は大学に於ける佛教学の発達と共にどのように維持され、或はどのような特色を発揮して行くかは今後の注意してよい問題であろう。これは形は小さいがヨーロッパに於けるカトリック僧院のキリスト教研究と大学に於けるキリスト教との対比を思わせる。行学一致という研究態度に於て、カトリック僧院とタイワンの寺院佛教とは同傾向であると感ぜられた。アメリカでは事情が異っている。アメリカで、「教会キリスト教」といわれるのは大学のユニヴーサル・クリ

スチャンティーと対立した呼称である。而もそれは大学のアカデミズムからみれば大衆の布教を主としたもので研究と別個の領域であると考え、少くとも大学の学徒は自分達と同水準には見ていないようである。これはアメリカに於けるプロテスタント教会の心情である。キリスト教に於けるキリスト教学とキリスト教福音活動との間には東洋の寺院に於ける学問と信仰との距離以上に遠い距離があることは意外なほどである。東洋の佛教圏にはタイワンといえどもそれほどの距離が存しないということを見た。

大学外の文化団体を網羅して中華学術院が設立せられている。これは人文・社会・科学に関する最高の学術院であって米・独佛・等内外の有名学者を会員に入れている。会員は哲士・議士研士という身分に分かれ、総数千十名を数える。その中、哲士は外国人七四名・本国人一七八名である。この下に哲学・政治・地学等二十種の学術団体が入れられている。又、毎年、国際会議が開かれ、人文学は二年毎であって一九七一年に次回が開かれる。筆者の如き者もその会員（哲士）の一人に推されて帰ったが意外な栄誉でもあった。文化交流の上で何か学徒の役に立てればと思って推せんを受けたことである。張其的博士が学術院長の地位にいる。

原始佛教を初め大乗佛教研究に関して言えば、ヨーロッパは凡て原始佛教を根拠として行われたし、又、現在もその諸資料の参考なしには行われていない。過去十ケ年にわたって私も屢々予告しておいたことであるが、ヨーロッパの学界は阿含・ニカーヤ研究からアビダルマ研究に向うであろうということは予告の如く歴然として来た。ウィーンのフラウワルナーがその研究の一部として、アビダルマの経典史に注目し出し、既に北伝アビダルマの論書の歴史的発展を論文としてまとめている。更に本年度（一九七〇年）に入りて、ハンブルグ大学のベルンハルト教授はアビダルマ研究を講義題目にさえ掲げるに至った。私のハンブルグ大学に在職中もこの点についてベルンハルト教授と談合して来たが、ハンブルグ大学に現在チベット学者による佛教学が樹立せられるに至った。合計八種もの講義が花々しく開講された。予想の如くヨーロッパではハンブルグが佛教学の中心となりつつあることはもはや疑う余地もない。過去に於てもこれ程、佛教学が多く開講された大学はどこにも存しない。幸い我がセミナーより田端哲哉君が、三月ハンブルグ大学へ三年間の留学に渡独した。彼の地の友人教授より私に「良い学生を送ってくれた」ことを謝する私信がとどいている。我々はこの方面へ出て活力をたくわえて帰朝する学徒の増加することを特に願うことである。

ともあれ、欧米の学徒と同じ資料をあつかわねばならない我々の任務は困難であるが、しかし、よろこびも多い。我々は国際的飛躍を夢みて、欧米の研究態度をマスター出来る地位に立っていると信ずる。しかし、将来はこれだけでは決して充分ではない。既述の如く、中国語の研究が更に追加されねばなるまい。そのことを特に中国を近く持つ我国佛教界は知らねばならない。ヨーロッパでは佛教学・中国文学・中国語学は一つの文

化圏の学として合せ学ばれている。だから専攻の学生は中国語で話し中国語で理解して行っている。屢々我々はコンミュニケーションを欠くことすらあって不便であった。ヨーロッパが更にチベットの古典及び現代文の読破を目ざして講義を開講するに至ったのも一つの文化圏に入る文化人としてチベットを広く眺めているためである。佛教学の専門分野はかかる広い視野に立つことなしには決して確固たる体系とはならないであろう。

最後に繰り返すならば、佛教という外国文化を研究する上に最も必要なものは諸語学である。欧米人は始めも終りも語学を主として取扱う。我国で屢々行われるように語学を軽視して容易に哲学思想へ入りこむことは厳に慎しむべきであろうと思う。尤も欧米人の考える語学とは言葉の遊びではなく、もっと本質的なもの即ち文字通り語の学は「ロゴスの学」である。私はこの点を押えて、私は先に「哲学を学ぶ要はない」と極言したことであった。この欧米の研究態度からして、ホンコン・タイワン等で漸く始まったばかりと思える新しい佛教学も中国語だけにとどまらず、古典インド語の研究を最も重要視して始める必要があると言いえよう。その努力が本学に在籍する若い中国人研究者達によって熱心に従事せられ始めたことはよろこばしい。